一色学びの館企画展

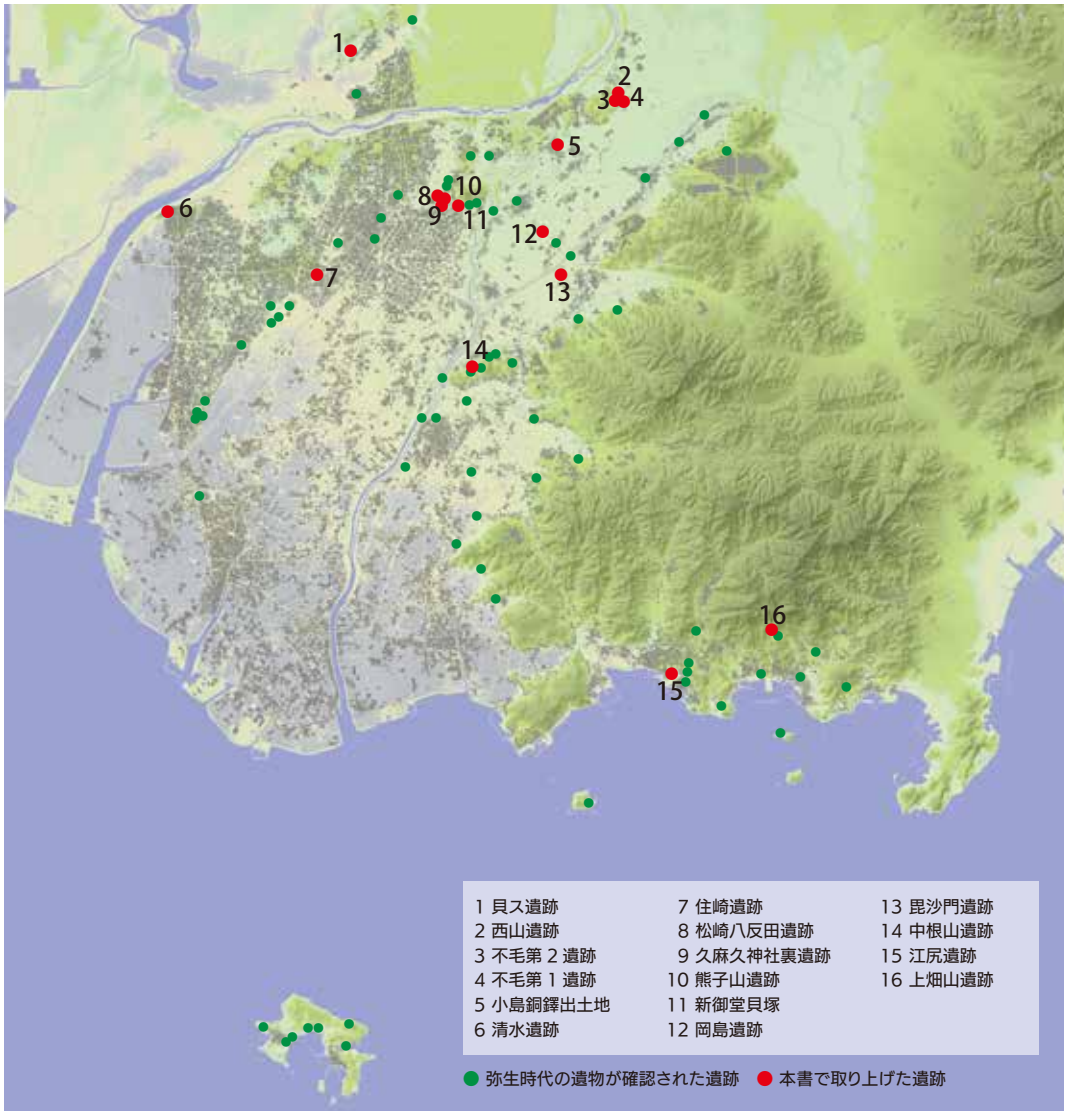
弥生時代の西尾

西尾市教育委員会

文化庁 地域の特色ある埋蔵文化財活用事業

今から2500年以上前、大陸から北部九州に稲作農耕や金属器がもたらされ、その文化・技術は日本列島に広く伝わりました。日本は狩猟や採集により食料を得た縄文時代から、自分たちで食料を生産する弥生時代へと次第に移り変わっていきます。

西尾市域においても西日本から伝わった文化の影響を受け、弥生時代が幕を開けました。新しい文化が到来し、それまでの暮らしから社会の在り方までも大きく変わっていった弥生時代を、西尾市域に住む人々はどのように過ごしていたのでしょうか。市内遺跡の発掘調査成果や出土資料をもとに、弥生時代の西尾を紹介します。



西尾市域では、現在87か所の遺跡で弥生時代の遺物が確認されています。

弥生時代の初め頃には縄文時代と同じように台地の端に遺跡が形成されました。その後、海面水位が下がったことにより低地が拡大すると、人々の居住域は徐々に広がっていきます。

弥生文化が定着した弥生時代中期には、矢作川と広田川によって形成された沖積低地に大規模集落である岡島遺跡が出現しました。

一方で、中期末～終末期になると丘陵上にも集落が築かれるようになります。その中でも中根山遺跡は丘陵斜面に築かれた遺跡で、環濠で囲まれた建物などムラの跡が見つかっています。また、佐久島でも弥生時代後期の遺物が出土しており、ムラが存在していたことがわかっています。

表紙写真（左上上段より）：岡島遺跡出土の銅鏃、小島町出土の銅鐸（東京国立博物館蔵）、岡島遺跡出土の鹿角製釣針、清水遺跡出土の土偶（南山大学人類学博物館蔵）、岡島遺跡出土の弥生土器、住崎遺跡出土の鳥形木形品、（背景）松崎八反田遺跡弥生土器出土状況写真

弥生文化の伝来

弥生時代前期

今から2500年以上前に大陸から北部九州に伝来した弥生文化は、次第に日本列島に波及していきました。しかし、弥生時代前期の三河地域以東では、本格的な稲作農耕は行われず、縄文時代と変わらない狩猟・採集を中心とした暮らしをしていたと考えられています。海の幸や山の幸が豊かな地域では、自然と共生する生活の方が営みやすく、安定していたのでしょう。

しかしながら、遺跡からは新しい文化をいち早く取り入れ生活をしようとした弥生人の痕跡がみられます。

清水遺跡（中畑町）

矢作川最下流部の台地上に位置する集落遺跡です。昭和25年に南山大学人類学研究所によって初めて本格的な発掘調査が行われ、弥生時代前期の土器がまとまって出土しました。出土品の特徴から、弥生文化はまだ定着せず狩猟・採集中心の生活を送っていたと思われ、弥生時代の開始期の様相を示す遺跡として注目されています。

第1次調査（昭和25年）の様子
（南山大学人類学博物館提供）

腹面　背面

土偶（南山大学人類学博物館蔵）
乳房が表現され、身体には線刻による描画があります。

江尻遺跡（西幡豆町）

三河湾に注ぐ小野谷川右岸の低丘陵南端に位置する集落遺跡です。平成17年に発掘調査が行われ、三河地域では珍しい弥生時代前期の環濠が見つかっています。環濠からは弥生文化の波及の目印となる遠賀川式土器と、弥生時代前期の三河地域で特徴的な条痕文土器（二枚貝の縁などを使って表面に筋をつけた土器）が一緒に出土しました。

弥生時代前期の環濠

遠賀川式土器

江尻遺跡出土の遠賀川式土器
（壺の胴上部）
模様が丁寧に描かれています。

大陸の影響を受けて作られた、弥生時代前期の土器です。遠賀川式土器は北部九州から東海地方までの広範囲で稲作農耕が行われた遺跡から普遍的に出土しており、弥生文化（稲作農耕の普及）の指標となっています。市内では清水遺跡（中畑町）、江尻遺跡（西幡豆町）、中根山遺跡（吉良町岡山）、新御堂貝塚（八ツ面町）で出土しています。

市内最古のコメ資料！

籾痕が残る土器
（南山大学人類学博物館蔵）

清水遺跡からは口縁部の外面に籾痕が残る土器が出土しています。遺跡が所在する場所は稲作の適地ではなく、他に農耕を示す道具類が出土していないため、これによって清水遺跡で稲作農耕が行われていたと言えるわけではありませんが、弥生時代中期前半に位置付けられるこの土器は市内におけるコメに関する最も古い貴重な資料です。

貝ス遺跡（南中根町）

市域北部の矢作川右岸の台地上に築かれた遺跡です。弥生時代前期の人骨が出土した墓が6基見つかっています。縄文時代に引き続き屈葬（手足の関節を折り曲げた姿勢で埋葬すること）が行われています。

埋葬人骨写真　横臥屈葬（左）と仰臥屈葬（右）

稲作の定着と弥生文化の発展

弥生時代中期

弥生時代中期の初め頃、「弥生の小海退」と呼ばれる海水準の低下がピークに達しました。それに伴い矢作川下流域でも陸地化が進み、沖積低地が拡大します。

沖積低地は水田稲作農耕を行う上で重要となる水が得やすく、耕作するのに適した土質で、まさに稲作の適地でした。また、稲作農耕は多くの労働力を必要とするため、水田に適した土地には大きなムラが築かれるようになります。市内の岡島遺跡はその代表的な遺跡のひとつです。また、中期後半になると新たな文化が伝わり、市内の弥生時代遺跡は大幅に増加します。

岡島（おかじま）遺跡（岡島町・江原町）

矢作古川下流域の沖積低地に広がる集落跡です。弥生時代中期に成立・発展し、三河地域を代表する大集落となりました。遺跡の想定範囲は約115,000㎡とされています。

遺跡からは多数の竪穴建物や方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）・土器棺墓（どきかんぼ）、集落を取り囲む環濠などが見つかりました。

遺物は大量の弥生土器のほか、大陸文化の影響を受けた磨製石器、石包丁、鹿角製釣針（ろっかくせいつりばり）、多孔銅鏃（たこうどうぞく）、木製農耕具など多種多様な遺物が出土しており、この地域の弥生文化や地域間の交流を知る上で貴重な資料となっています。

遺跡遠景（昭和52年撮影）

岡島遺跡出土品

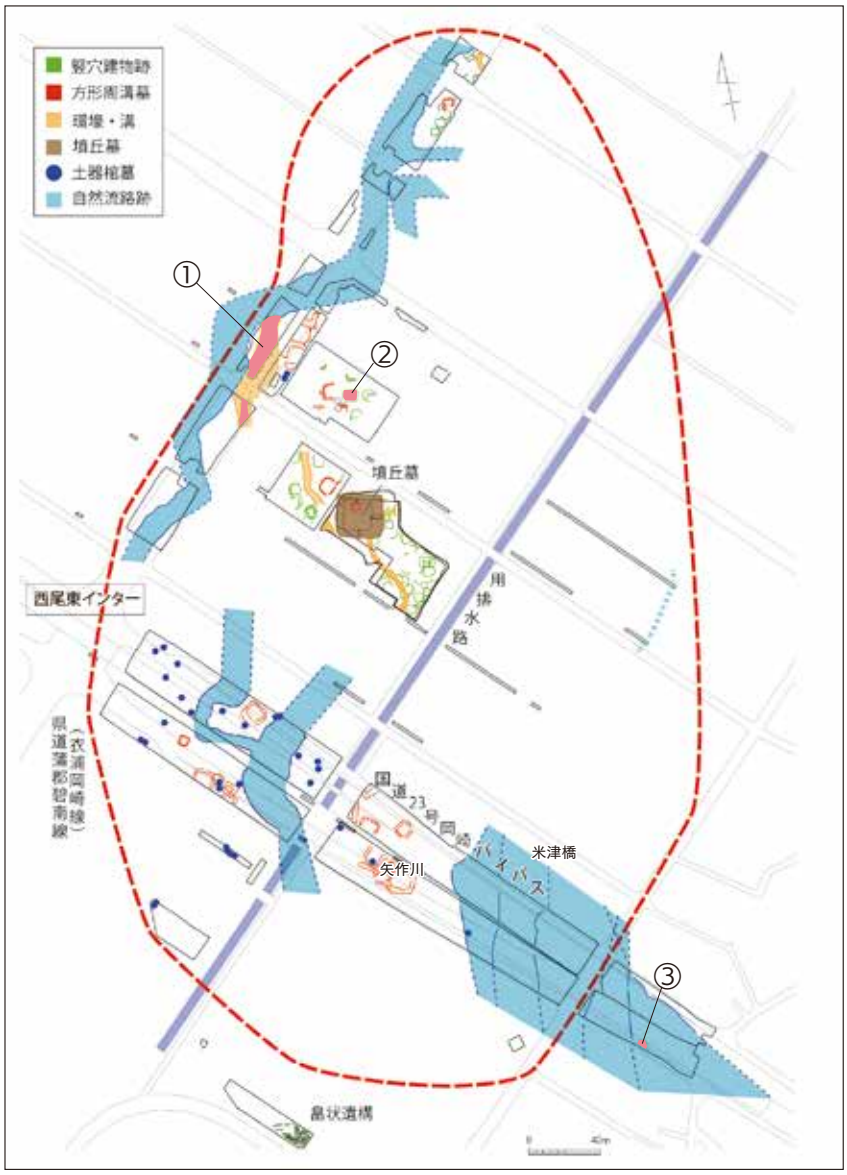
岡島遺跡発見の契機

岡島遺跡のある江原町・岡島町付近は、三河地震によって激しい地盤沈下が起きたため、昭和28年に水路の掘り下げ工事が行われました。その際掘り上げた泥や砂の中から多量の土器が見つかり、三和中学校（現在の東部中学校）歴史クラブの生徒によって採集されたことが遺跡発見につながりました。

採集品のひとつには銅鐸を模して造られた銅鐸形土製品があり、市指定文化財となっています。

この時の採集品は現在東部中学校で展示保管されています。

三和中学校歴史クラブ



岡島遺跡の発掘調査区と主な遺構（『新編西尾市史　通史編　原始･古代･中世』より作成）

①環濠（愛知県埋蔵文化財センター提供）
遺跡の西端で大規模の環濠跡が見つかっています

②竪穴建物
建物跡の床面から30点以上の弥生土器がまとまって見つかりました

③焼けた竪穴建物（愛知県埋蔵文化財センター提供）
柱などの木材の炭が残っています

弥生時代の墓

岡島遺跡からは埋葬施設の四方を溝で区画した方形周溝墓や土器を棺として骨を収めた土器棺墓が見つかっています。特に方形周溝墓は弥生時代に新たに出現した墓制です。

これらの墓は西側と南側に集中しており、居住エリアとは環濠で隔たれていた可能性があります。

土器棺墓（愛知県埋蔵文化財センター提供）
大型の鉢を蓋と身に利用しています

中期の方形周溝墓（愛知県埋蔵文化財センター提供）
周りの溝は繋がらず四隅が切れているのが特徴です

西尾の稲作の出発地

岡島遺跡では水田遺構は発見されていませんが、農耕具や稲穂を刈るための石包丁、炭化米などが出土しています。さらに土壌分析など科学的な検証から、稲作農耕が行われていたと考えられます。

岡島遺跡から出土した炭化米

毘沙門遺跡（室町）

岡島遺跡から南東に約1㎞離れた沖積低地の微高地に位置し、弥生時代中期～後期の土器が見つかっています。

位置関係や出現時期から、岡島遺跡からの分村と推定されています。

弥生時代中期後半以降、市域で集落遺跡が大幅に増加します。

弥生社会とムラの変化

弥生時代後期～終末期

弥生時代後期～終末期は倭国大乱、その後の卑弥呼の擁立と、社会的混乱が生じた時代にあたります。

この頃市域においても全国各地の動きと同調するようにして、ムラの形に変化が現れました。ひとつは居住域の周りを溝で囲む環濠集落の出現です。もうひとつは、山上や丘陵斜面上にムラを築く「高地性集落」の出現です。弥生時代は、稲作農耕で生活が豊かになる一方で、特定のムラに集中した「富」をめぐってムラ同士の争いが起きたと考えられています。そうした事態への防御として、また水害などの自然災害に備えるため弥生時代のムラは姿を変えていきました。

八ツ面山西南麓遺跡群

八ツ面山西南麓には松崎八反田遺跡・熊子山遺跡・久麻久神社遺跡・新御堂貝塚がほぼ連続して所在しています。弥生時代にはこれらの遺跡はひとまとまりのムラであったと考えられ、八ツ面山西南麓遺跡群と総称されています。

弥生時代後期には遺跡群全域で遺構・遺物が確認されるようになります。

弥生時代中期には墓域であった松崎八反田遺跡は、後期になると熊子山遺跡と同様に竪穴建物からなる居住域へと転換しました。墓域は新御堂貝塚に移ったとみられ、土坑墓や土器棺墓が複数見つかっています。

弥生時代後期～終末期に盛期を迎えた拠点集落のひとつであったと考えられますが、古墳時代初頭には衰退していきました。

八ツ面山西南麓遺跡群分布図

弥生時代中～後期の竪穴建物と方形周溝墓（松崎八反田遺跡）

弥生時代後期の環濠（熊子山遺跡）

土器棺（新御堂貝塚）

住崎遺跡（住崎町）

市域西側の碧海台地縁辺から沖積低地に広がる遺跡です。昭和61・62年に発掘調査が行われ、土器のほか銅鐸形土製品や木製の農耕具・祭祀具などが出土しました。

調査地点は低湿地であったため地下水位が高く、木製品が良好な状態で見つかっています。この中で、鳥形木製品や武器形木製品は市内唯一の発見例で、祭祀に使われたと考えられています。

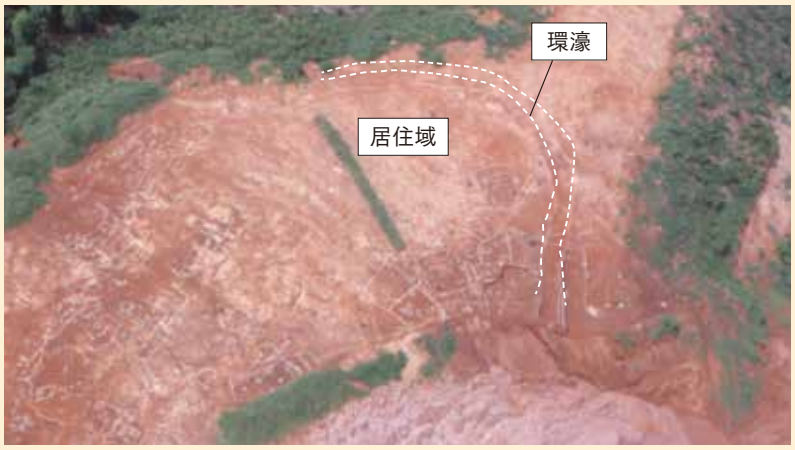
発掘調査の様子（昭和61年撮影）

鳥形木製品

丘陵上に築かれた遺跡

中根山遺跡（吉良町岡山）

標高19～36mの岡山丘陵上に築かれた環濠集落です。丘陵斜面では弥生時代から古墳時代の竪穴建物が93基見つかっており、居住域を取り囲むように環濠が巡っているのが確認されました。環濠は弥生時代後期に掘削され終末期には埋没したと考えられています。



昭和63年調査区全景

上畑山遺跡（東幡豆町上畑山）

標高265mの愛宕山から三河湾に向かって下る、標高約150mの丘陵上に築かれていた集落遺跡です。昭和43年に行われた岩石採取工事の際に弥生土器片が採取され、遺跡発見につながりました。正式な調査が行われないまま遺跡は滅失してしまいましたが、三河湾沿岸部の高地性集落遺跡は類例が少なく、貴重な遺跡と言えます。

遺跡遠景

西山遺跡
不毛第１・第２遺跡（東浅井町）

標高10～20mの浅井丘陵上に立地し、弥生時代中期～終末期の土器が確認されています。開発の進行により未調査のまま遺跡の大部分が滅失してしまいましたが、西山遺跡と不毛第１遺跡で環濠と思われる溝跡が確認されており、それぞれ同時期に存在した環濠集落であったと考えられています。

環濠の断面

遺跡位置図

西尾の銅鐸

銅鐸は大陸から伝来した青銅器で、祭祀に用いられたと考えられています。

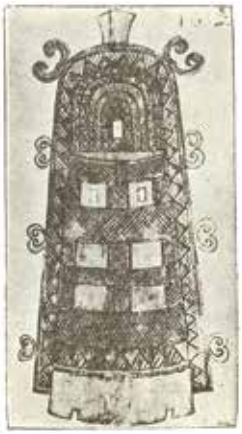
西日本を中心に北部九州から関東地方までの地域で520個余り、愛知県内では伝承も含めて56個程発見されていますが、西三河地域で実物が現存しているのは3点のみです。その内の１点は市域北部の小島町で発見され、小島銅鐸と呼ばれています。現在は東京国立博物館に収蔵されています。

小島銅鐸は高さ約30cm、底部約20cm×10cmの小型銅鐸で、明治30年に個人宅で住民が井戸を掘っていた時に出土したと伝えられています。出土状況の記録がなく単独で見つかったため、この銅鐸を用いた祭りを行ったムラがどこにあったのかは特定されていません。また、市内からは銅鐸を模した土製品が5点出土しています。

小島銅鐸（東京国立博物館蔵）
Image：TNM Image Archives

住崎遺跡出土の
銅鐸形土製品

安泰寺山銅鐸



西尾にはもうひとつ銅鐸の存在が伝えられています。

写真は江戸時代の『銅鐸圖記』（山本貞震著）に掲載された、西幡豆町から出土したとされる銅鐸の図です。安泰寺山銅鐸と呼ばれています。実物は古くから所在不明となっていますが、貴重な市内の銅鐸出土例として注目されています。

弥生時代の石器

弥生時代には稲作農耕や金属器とともに、新しい種類の石器も伝わってきました。特に石斧は石を磨いて作る磨製石斧が主流になり、用途にあわせて様々な形のものが作られています。

農耕が本格的にはじまり農具を使用するようになると、それに伴い農具を製作・加工するための道具が必要になります。岡島遺跡からは、樹木を伐採するための斧や木製品を加工するための道具など、弥生時代に特徴的な石器が多数出土しました。

また、これらの石器は遠方で産出する特定の石材を使用しており、石材や製品を他の地域から入手する流通経路があったと推定されています。

旧石器時代から数万年にわたり使用されてきた石器ですが、弥生時代とともに終わりを迎えます。大陸から伝来した鉄器が広がり始めると徐々に道具としての役割を譲るようになり、石器は姿を消していきました。社会は鉄器中心の新たな時代へと変化していきます。

岡島遺跡出土の石器類

1 両刃石斧

大陸から伝わった磨製石斧の一種で太型蛤刃（ふとがたはまぐりば）石斧とも呼ばれます。断面が楕円形で、三重県産の重量のあるハイアロクラスタイトと呼ばれる石で作られており，主に樹木の伐採用として使用されたと考えられています。

2 片刃石斧

扁平片刃石斧（上段左2点）や柱状片刃石斧（上段左から3点目）、ノミ状石斧（下段右2点）など、大小様々な形のものがつくられ、木製品などの加工に用いられました。

特殊な石包丁

弥生時代の稲穂を刈る道具として知られる石包丁ですが、岡島遺跡で少し変わった石包丁が出土しています。この磨製石包丁は横幅26.5cm、高さ13cm、重さ650gを測る大きな製品です。背の部分が湾曲し、刃部はやや外反する形態で、中央上位に一個の孔が開けられています。通常見つかる石包丁と比べ刃部は2倍以上もあり、日常品ではなく祭祀に使用されたと考えられます。

弥生時代の製塩土器

市内沿岸部では古くから塩づくりが盛んに行われていました。古代以前には海水を土器に注ぎ、煮詰めて塩を生産しました。この塩づくり専用の土器のことを製塩土器と呼びます。

写真は清水遺跡で見つかった弥生時代終末期の製塩土器の脚部分です。三河地域で最も古い塩づくりの遺物と言えます。この製塩土器は大阪湾周辺の土器と似ており、海を介した交流が想定されています。

『一色学びの館企画展 弥生時代の西尾』　編集発行：西尾市教育委員会文化財課　発行日：令和5年10月21日
協力：南山大学人類学博物館、東京国立博物館、公益財団法人愛知教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター